

月刊

立川と語ろう 立川に生きよう

えくとびあん

(EKUTEBIAN VOL.13 DECEMBER 1984 EKUTEBIAN)

12



まい あと ■ ボタニカル・アート
「ドイツトウヒ・白実のヤドリギ」 by 角田葉子



竹内洋介さんが曙町
1丁目に「無庵」の暖簾をかかげ、この11月
で丸5年。そして今、
竹内さんの蕎麦に対する情熱の高まりは、立
川に留まらず大きく広
がろうとしている。今年の春に山梨に土地を求め、
蕎麦の栽培を手掛けてこの秋に収穫。最初の段階か
ら納得のいく「100%自家製」の蕎麦作りをめざす。
また来夏には、山梨は小淵沢に店を開店させる予定
もあり、今後夏の間は立川の無庵を閉めるというほど。
今回、その情熱の一端を「そば寿し」という形
で表していただいた。もともと粘り気のない蕎麦を
幾重にも押し重ねて季節を語らせていく。ほのかな
酢の香りと蕎麦の歯ごたえを五感のすべてで味わえ
ば、竹内さんの食の美学そのものをぞちそうになっ
た気分。この先新しい展開をみせる竹内ワールド、
楽しみである。

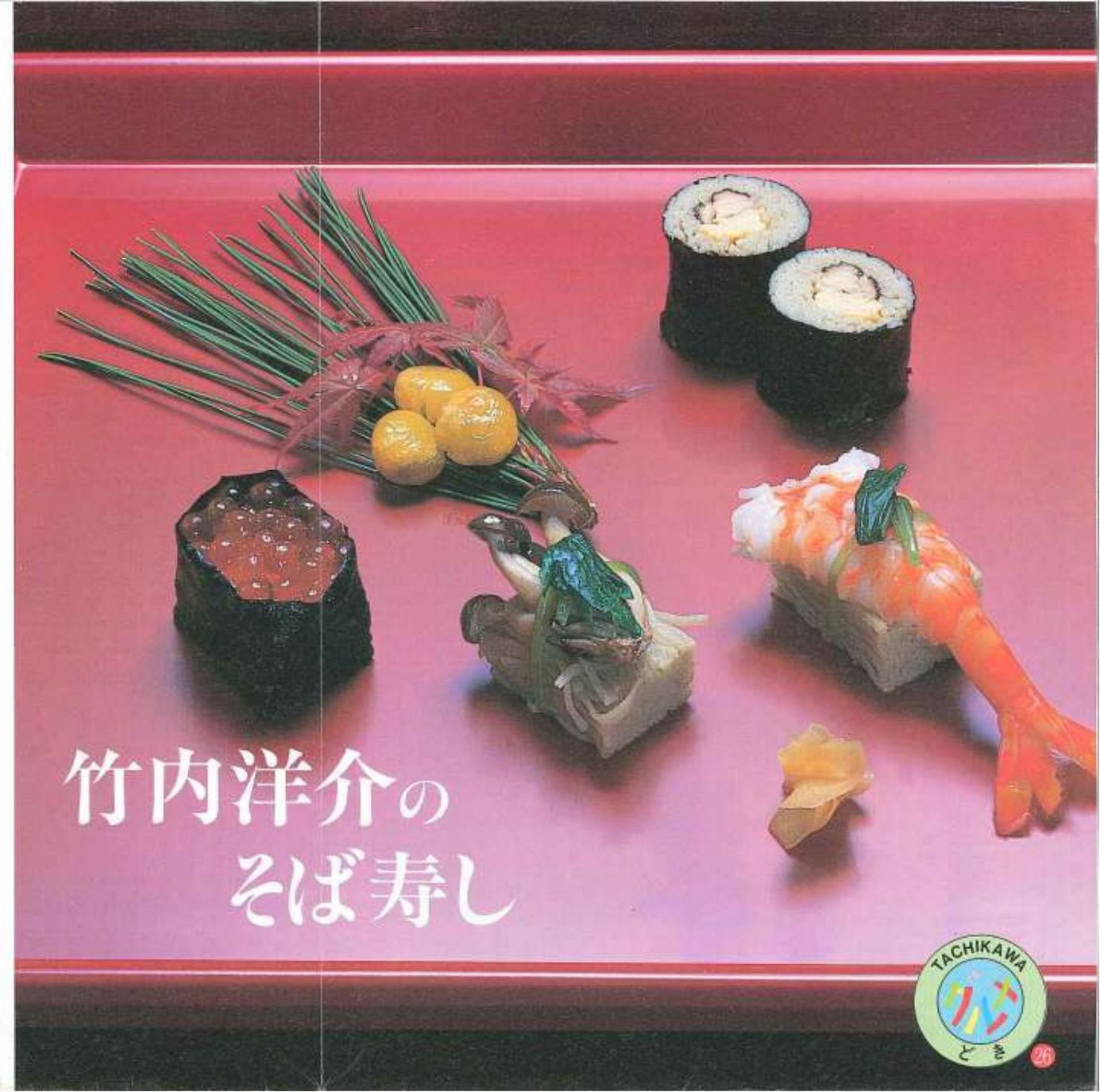
撮影：井上義治



仕上がりに
自信あり。

撮影・DPE
写真のエース

立川市柴崎町2-9-1
0425-23-0051



竹内洋介の そば寿し

TACHIKAWA
たちかわ

夜の北口、ギターの響き、 流し歩いて30年

立川唯一の流し歌手、合志一孝さん

「オレは唄うことしか取柄がないからサ」

合志一孝さん(富士見町)はそう言って笑った。

立川でただひとり、もう30年以上も、毎夜北口界隈の酒場に「生きた」うたを運び続ける。

カラオケ全盛の世の中、「やり難くなつたね」と言いながらも

胸のポケットベルは鳴りっぱなし。

合志さんのうたごゑを求めて、あちこちの店からお呼びがかかる。

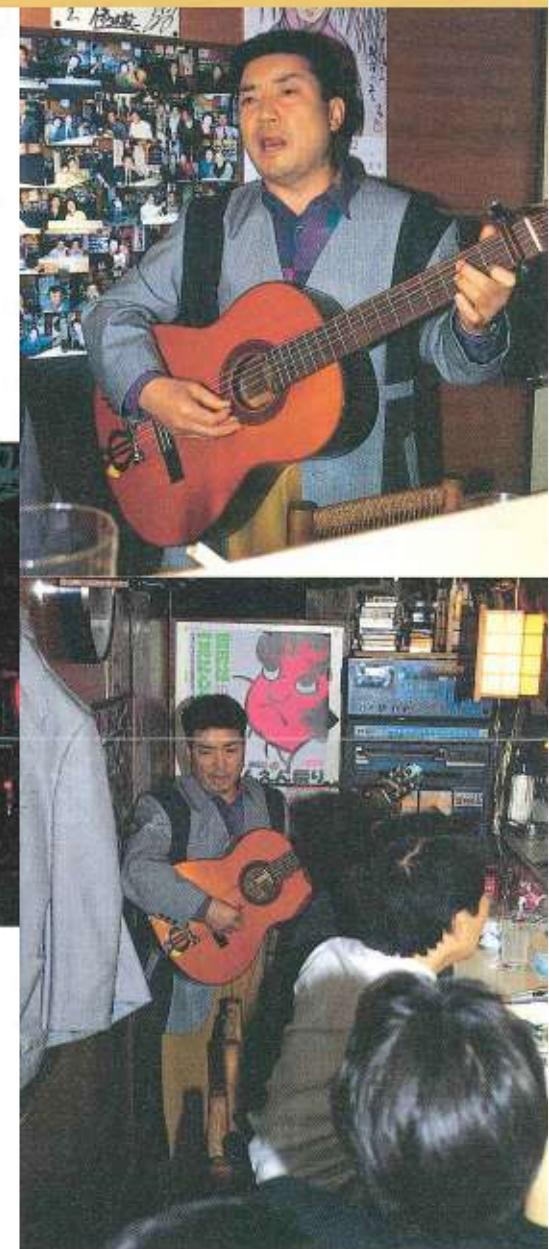
「悪いね、次のお客さんのとこ行かなきや」

最後に1曲お願いすると、合志さんはギターのネックにカポタストをはめ、聞き覚えのある旋律を爪弾きはじめた。

♪曇りガラスを手で拭いて、あなた明日が見えますか....

マイクなんていらない。熱燗の湯気がのぼる店内を、そのうたごゑでいっぱいにして、合志さんは「ここに来ればいつでも会えるからサ」という言葉を残して、次の場所へ向かった。

協力:桃太郎(曙町) 撮影:中村 伸



わたしの 玉手箱

1. 荣町・野口慶次さんの「蝶」

「外国の蝶みたいな原色の美しさはないけど、
なんとなく日本の蝶に惹かれるんだよねえ」
日本の空に、日本の花に舞う、日本の蝶。
野口さん、同感です。

